聞名仏教

第 180 号　　毎月発行
（発行日）2025 年 9 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

念珠の緒（お）を強くして

佐々木蓮麿

すべて信仰上で悩むことは、自分の胸三寸即ち心が思い通りにならぬことでありましょう。ありがたいお説教を聞いているときは、涙がこぼれるように喜べるが、お説教が終って帰える下向のそのときは、ありがたい気持ちは消えて、浅ましい心がムラムラと起こってくるのです。また仏前に端座して合掌した途端は殊勝な気持ちになるが、やがて手と心とが別になって、手は仏様に向いているが、心は台所の方に走ったり、子供のところに飛んで行ったりして始末のつかぬものであります。

かつてある坊守研修会に行ってお話をし、あとに座談会に移りましたところ、聴講された坊守さん達が異口同音に「こうして家庭からはなれてお寺に宿泊し、尊いお話をきかせていただいていると、まことにありがたく念仏を喜ばせて頂くことができますが、また家庭に帰ると、もとの木阿弥になりそうで、それが気になります云々」と云われたことがあります。こうした嘆きは、いまの坊守さんに限ったことではありません。すべての聞法者が経験する嘆きではありますまいか。

これについて思い出すことは鎮西の本覚坊が明遍僧都（みょうへんそうず）に向って問われるには「心が乱れたときに称える念仏は真の念仏とは言えぬ、心をしずめて一心に仏を念じて称える念仏が真の念仏であると聞きますが、そういう尊い念仏を行ずるには、どういう心がけをすればよいでしょうか・・・」と。

すると僧都が答えて言われるには「そういう尊い念仏は上根の人のみができることで、下根の私どもとしては、心の統一ということは到底できるものではありません。そこで私は念珠の緒を強くして、心の乱と、不乱とにかかわらず、ひたすらに念珠をくって称名するのみであります。心の乱と不乱とにかかわりのない念仏こそ本願相応の念仏と承っております」と答えられたそうであります。

明遍僧都は、かつて善光寺参詣の帰りに法然聖人に対面し「いかがして、こんど生死をはなれることができましょうか」と尋ねられたところ、法然聖人は「ただ念仏してこそ」とお答えになりました。すると明遍僧都は「念仏しながらも妄念が起こるのをどう始末すればよろしいか」と重ねてお尋ねになると法然聖人は「いかに妄念が起ころうとも仏の本願力によって往生はするなり」とお答えになりました。この一言で明遍は疑念が晴れて退出されたところ、法然聖人は、あとで独りつぶやいて言われるに「妄念を起さずして往生せんと思わん人は、生まれつきの目鼻をとりすてて念仏申さんと思うがごとし」と。

なんというハッキリとしたお示しでありましょうか。

（了）

《秋季彼岸会》
九月二十二日（月）
午後二時始まり
法話　念佛寺住職

清沢満之先生に学ぶ ⑥

『絶対他力の大道』より、清沢満之先生の文を引用いたします。

我等は死せざるべからず、我等は死するも、なお我等は滅せず。生のみが我等にあらず、死も亦我等なり。我等は生死を並有するものなり。我等は生死に左右せらるべきものにあらざるなり。我等は生死以外に霊存するものなり。然れども、生死は我等の自由に指定し得るものにあらざるなり。生死は全く不可思議なる他力の妙用によるものなり。然れば、我等は生死に対して悲喜すべからず。生死なお然り、況んや其の他の転変に於いてをや。我等は寧ろ宇宙万化の内に於て彼の無限他力の妙用を嘆賞せんのみ

＊　＊　＊

さて、

「我等は死せざるべからず、我等は死するも、なお我等は滅せず。生のみが我等にあらず、死も亦我等なり。我等は生死を並有するものなり」

ですが、「我等は死せざるべからず」で、私たちはかならず死ぬ存在である、といわれ、しかるに「我等は死するも、なお我等は滅せず」といわれるのです。この場合の「我等は滅せず」という「我等」は、「我等の身体は」というのではなくて「我等のいのちそのものは」という意味でありましょう。そういう「いのちそのもの」は「滅せず」で、無くならないといわれ、そして「生のみが我等にあらず、死も亦我等なり」といわれるのです。

我等の身をして身たらしめているいのちそのものは、はかりなきいのちであって滅しないのです。この事でいつも譬えを出すのですが、先達が「花びらは散っても花のいのちは散らない」といわれるように、桜の花びらはあるときしばらくすると散る。しかしながら桜の花を咲かせている花のいのちそのものは散らず、毎年花を咲かせている。あるいは大海の波はそのつど起こって消えますが、大海の海水そのものは無くなりません。このように、花びらや波は私たちの身体に、花のいのちや大海ははかりなきいのちに譬えられます。我等の身は滅しますが、我等の身となってはたらいているいのちそのものは滅しない。それゆえこういういのちは「生死を並有するものなり」といわれるのです。

鎌倉時代の禅の高僧・道元禅師（一二〇〇～一二五三）の言葉に

「生死は、すなわち仏の御いのちなり」（正法眼蔵・生死の巻）

という有名な言葉があります。この意味ですが、「仏の御いのち」とは、仏の本質である寿命無量のはたらきであります。人として生まれるいのちも死するいのちも、どちらも「仏の御いのち」の活動の現れでありましょう。仏の御いのちは、真宗でいえばアミダ仏です。『正信偈』では最初の一句に「帰命無量寿如来」といわれる、その「無量寿如来」です。「生死は、すなわち仏の御いのちなり」とは私たちが生死、すなわち生まれて死ぬのは、はかりなきいのちのはたらき、いとなみの外にはないということです。人として生まれるのもはかりないいのちに於いて生まれるのであり、死ぬのもはかりないいのちに於いて死ぬのです。人の身（心）は死して形が無くなっても、その全体が「仏の御いのち」のいとなみなのだ、といわれるのです。

ただ人間には心があり、心の中に、与えられたいのちに対する根深い執着があります。それゆえ「生を愛し、死を憎む」のです。生を喜び、死を悲しむのです。こうして一生死に脅かされてしまいます。ここに根本的な不安があり、不安な人生があるのです。それを「苦」といいます。苦はインドの言葉では「ドゥッカ」（dukkha）といいます。これは押さえつけられている苦しみという意味で、いわばストレスです。死は最大のストレスです。

人間はたんなる石や草ではなくて、心があります。アミダ仏のいのちのほかに私のいのちはないのですが、我執我愛の思いが起こって、与えられたいのちの私を「我が物」として深く執着してしまいます。そこから私の身をおびやかすものに対して不安な思い、いわば「おもいわずらい」（煩悩）がしきりに起こるのです。私のいのちが大きなアミダ仏のいのちの一部、いわばアミダ仏と一体のいのちであることだけなら問題はありませんが、人間には心がありこうした煩悩が盛んですから、不安が起こって止まないのです。

もともとアミダ仏と一体のいのちであることをはっ

きりと認識しているのなら、いいのですが、そうではなくてアミダ仏と私自身を意識的・無意識的に切り離し、「不安な思い」を起してその思いに振りまわされてしまうのです。そこでこれを何とかしなければ苦しくてやっていけぬということで、これが人生の大きな問題になるのです。

しかしどこまで迷いが深くても、私のいのちはアミダ仏のいのちを一瞬も離れないのです。生きようが死のうがアミダ仏の御いのちの中なのです。このことを清沢先生は「我等は死せざるべからず、我等は死するも、なお我等は滅せず。生のみが我等にあらず、死も亦我等なり。我等は生死を並有するものなり」と仰せられるのです。

「我等」は私たちはということですが、私たちは諸物・万物の一つの物といってもいいでしょう。そういう点で人は虫も草も同じいのちに存在せしめられています。この有限な身は生滅の中にいます。生滅の中にいますが、生滅させているいのち（エネルギー）は生滅しません。物が生滅するのは、生滅せしめるエネルギーというか、はたらきがあるからです。波が現れて消えるのは、元に大きな海水があるからです。雲が起こって、また消えるのは大きな大気（大空）が元にあるからです。

ですから生だけが我等ではなく、また死だけが我等ではなく、生死をして生死たらしめている大いなるはたらきが、我等のいのちそのものです。このいのちは生死を並有しています。これがアミダ仏です。

次に「我等は生死に左右せらるべきものにあらざるなり。我等は生死以外に霊存するものなり」といわれる「我等は」という意味は「我等の本当の自己は」と言葉を添えると意味がよく分かります。我等の本当の自己は「生死」「老病死」によって左右されない。本当の自己ははかりないいのちの他にはないいのちだから、生まれて死んでなくなることもありません。我等の本当のいのちは生死を超えたいのちであるという意味で「生死以外に霊存するもの」であって、「生死に左右されない」のです。

「生まれて死ぬる事」は人間が決めたことではなくて、有限な私たちにとって、「生まれて死ぬ」ことは絶対的に決定されていることです。自我（私）の能力でこれを自由にあつかうことはできません。時に自死をすることがあるのも、「生きている」という原事実が基礎にあるからです。そして「生まれること」や「生まれたものは死ぬこと」にたいして、私たちの自由は全くありません。それははかりなきいのちのはたらきによって、絶対的に決定されていることなのです。このことを次に「然れども、生死は我等の自由に指定し得るものにあらざるなり」といわれるのです。生まれることも、生まれた者が死ぬことも、これは人の意思でどうにかなることではなく、全く私たちの自我の計らいが全く及ばない、絶対的に決定されていることです。

ではこうした生死がまったく自我の自由にならないことは、何の力によって決定されたのかというと「生死は全く不可思議なる他力の妙用によるものなり」といわれるのです。全く不可思議なる他力の妙用といわれるのは、アミダ仏の寿命無量のはたらきといえましょう。私がその中で人に生まれ、生きて活動し、創作し、いろんなことを成していく、そして時が来てこの世を終える、その全体がアミダ仏のいのちの中であり、アミダ仏に於いてであり、アミダ仏とともにあり、アミダ仏のお徳を表わすべく生きているのです。どのようなことがふりかかろうともアミダ仏は私を離さないし、いつでもそこを立場として立ち上がれる。そこからもはや滑り落ちることも浮き上がることもできない場所に置かれています。人間感情の悲喜苦楽がそこには及ばないいのちの大地です。西田幾多郎博士の歌に

「わが心　深き底あり　喜も憂の波も　とどかじと思ふ」

とあります、その底がアミダ仏とともにいる場所です。そこで清沢先生は「然れば、我等は生死に対して悲喜すべからず」といわれるのです。

そして最後に「生死なお然り、況んや其の他の転変に於いてをや。我等は寧ろ宇宙万化の内に於て彼の無限他力の妙用を嘆賞せんのみ」と云われています。アミダ仏のはたらきは宇宙一切にはたらいてまします。まことに不可思議ないのちのはたらき、この不思議さを讃えずにはおれないと云うことでしょう。親鸞聖人も

「この如来、微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり」（『唯信鈔文意』）

と仰せられています。無量寿如来のましまさぬところはどこにもなく、一切にみちみちておられ、人の心に

もみちみちておられるとの仰せであります。ですから私たちの生も死も、アミダ仏のはたらきの中であります。アミダ仏のいなさらぬところはないのであり、アミダ仏と離れて私は存在しないのであります。

しかるに根拠のない無明によって、私たちは個々別々の存在と思い、孤独となり、他と対立しやすくなり、人々とのいのちの平等に気づくことなく、めいめいもちの小さな宝（才能、資産、性格、知能、学歴など）に重きを置きすぎ、他者と比較して、優越感ともなり劣等感ともなって人と人の間に差別をつくっているのであります。一切の人がともにこの絶対無限の妙用に於いて生きているという根本的ないのちの事実こそ、他の人々と平等にであえる場所であります。

最後になりますが、南無阿弥陀仏の念仏の声はこの絶対無限の妙用が、ご自身を私たちに気づかせるために、喚びかけてくださるお声であります。この念仏の声に喚び覚まされて、「無限他力の妙用を嘆賞（讃嘆）」させていただくのです。

（了）

【住職雑感】

前立腺のガンの疑いがあるということで、以前に受けたＭＲＩと生検を再度受けねばならなくなった。ＭＲＩを先ず受けたら、白い部分があり、高率的にガンの疑い有りということで、更に精確な生検を受けることになった。生検という精密検査はレーザーで十カ所ほどの細胞を取ってガン細胞があるかどうかを調べる。以前も行ったことがあるが、今度のは感染リスクの少ない方法で実施することになり、これは非常に痛いので全身麻酔をして行うことになった。八月のお盆が終った頃に一泊二日の入院で検査を終了した。そして一週間後に検査結果を聞く。結果、ガン細胞は見当たらないということで、以前もそうだったが、どうやらガンではなさそうであった。もしくは見つからないほどガンが小さかったということである。ひとまずホッとしたことであった。

生検の検査は結構大変なので、これを「絶対にせよ」と医師から言われたときは、いささかうんざりしたが仕方が無い。七月の初めから八月の終わりまでの二ヶ月間は平常の安らかな日常と云うよりは胸に少し雲がかかったような状態であった。日常生活は全く変わらなかったが、不安煩悩の雲が平生より濃い感じが続いた。こういう雲を正信偈では「雲霧」というが、その通りである。心に雲霧がなく日本晴れなら気分が非常によいのであるが、人生生活はいつも晴天とはいかない。どうしても煩悩の雲や霧が心にかかる。ただ日々は雲霧の濃い日と薄い日がある。平生は雲は薄く感じるが、今回は濃い日々がしばらく続いた。

ただ雲霧はどこまでも実体はない。不安はどれほど大きくとも実体はないのである。どんな不安もたんなる「思い」に過ぎないのである。そしていつでも変わらずにあるのはどっちにどうころんでも「今ここに生きている」という事実であり、その事実が一瞬一瞬続いていることである。この事実ははかりないいのち（アミダ仏）によって常に与えられているのであり、そこには悲喜苦楽という思いは届かない、確かな実在である。いわば「アミダ仏がともに居てくださる」のである。アミダ仏のいのちに抱かれているのである。此処（ここ）には苦はない。不安の苦は「頭の思い」だけにある。今生きているという身の事実に苦があるとすれば、「痛い」か「しんどい」という身体の感覚的な苦で、これは身体をもって生きているかぎりまぬがれない。安田理深師が「病気の苦は、痛いかしんどいかだけであって、それ以上でもそれ以下でもない」といわれたがその通りである。あとの「ああなったらどうしよう」「こうなったらどうしよう」というような不安は実体のない「思い」だけなのである。しかし、そうはいっても煩悩熾盛の凡夫で不安はどうしても起こってくる。道理はわかっても不安煩悩はしばしば起こるのである。しかしこの煩悩は有難いことに「お念仏の縁」であって、こうした不安な思いが起こると、そこに止まらず、お念仏をさせていただく。お念仏を称えると、お念仏はアミダ仏が「ここにいる」「お前の主（あるじ）であるぞ」「お前を抱いている」「死ぬのではない浄土へ連れて行く」のお声である。このお声が有難い。お念仏によって、不安な人生に耐えて生き、また安らぎを与えてくださる。不安には実体がなく、真にあるのははかりないいのちのはたらき（アミダ仏）ばかりであることをいよいよ知らされる。これが現在の依り処であり、最後の依り処でもある。

このたびのことで、ますますアミダ仏がより親しく感じられるように念仏聞法に励まねばならぬと痛感した次第である。

検査結果を聞くために診察室に入り、医師から面と向かって「何といわれるか」という時の気持ちは正直いやなものである。何人かのお方から、ガンの手術後に再発していないかどうか、ガンマーカーの検査結果を聞く時はすこぶる不安だと聞いたことがあるが、その気持ちが少し分かることであった。